



宮城県中学校長会

会 報



平成27年度前期の活動を振り返って

宮城県中学校長会

会 長 星 豪

早いもので今年のカレンダーも最後の1枚となってしまいました。各学校では文化祭や合唱コンクールなど地域に開かれた学校行事を開催し、実り豊かな充実した収穫を手になされ、進路指導や学校評価、次年度に向けての経営構想等で忙しい日々を送られていると推察いたします。

さて、平成27年関東・東北豪雨では、各地で避難勧告や避難指示が出され、河川の氾濫により甚大な被害を受けました。被害に遭われた皆様には心よりお見舞いを申し上げます。いつ何時でも起こり得る自然災害の恐ろしさと、防災への備えの大切さを改めて思い知らされました。

宮城県中学校長会のこれまでを振り返りますと、5月の総会では全日中教育ビジョン「学校からの教育改革」を踏まえた活動方針が承認され、さらには、次年度の「全日中宮城大会の実行委員は全員である。」ことを確認して本会の活動が順調にスタートいたしました。

6月に青森市を会場に開催されました第65回東北地区中学校長会研究協議会では、教育の今日的課題についての研究協議や意見交換を行い大きな収穫を得ました。さらに、次年度開催予定の全日中研究協議会宮城大会に向けては東北各県からの協力や支援をいただけるなど東北の団結と力強さを感じました。また、この青森大会では、「健やかな身体の育成と体力の向上を図る教育の充実」について、登米地区に発表いただきました。タブレットによる斬新なプレゼンテーションが実際目をひき、取り組まれた体力向上策や、健康の保持増進についての実践例が分かりやすく発表されました。家庭や地域、そして関係機関と連携した教育活動や、小学校長会との綿密な研究の連携

が進められたことは大きく評価されるものであります。併せて第66回全日中研究協議会福岡大会の第四分科会での素晴らしい発表にも感謝申し上げます。

また、10月に岩沼市で行われました第34回県中学校長会研究協議会仙台大会は、岩沼市文化会館をお借りしての開催になりました。仙台市校長会との分離開催後2回目でしたが、主管された仙台地区校長会の皆様のきめ細やかな配慮と熱意に支えられ、成功裏に終えることができました。

さらに、福岡市で開催された全日中研究協議会には、本県から47名もの校長先生方が参加し、次年度開催に向け、運営や会場を徹に入り細に入りつぶさに視察することができました。閉会行事では、中島副会長とともに壇上にて次年度開催を案内しました。次期開催地の宮城をプロモーションビデオで紹介し、宮城県、仙台市が一体となってアピールできたと感じております。開催地事務局からのアドバイスや全国の校長先生方との意見交流や情報交換など実り多いものとなりました。

次年度の全国大会開催まで一年を切りましたが、各部会においては鋭意会議を開催していただき、順調に準備を進めていただいておりますことに感謝を申し上げます。震災後初となる東北地区での全国大会開催という大義をしっかりと背負った研究協議会にしたいと思っております。さらには、「宮城の中学校70年」記念事業「記念誌発行」に向けても同時進行で順調に準備を進めていただいております。今後、次年度に向けて様々な動きが加速するものと思われませんが、会員の皆様の更なるご理解とご協力をお願い申し上げます。

第66回 全日本中学校長会研究協議会 福岡大会

研究協議会主題：「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」

福岡サンパレス他 平成27年10月28日(水)～30日(金)

第66回全日本中学校長会研究協議会福岡大会が10月28日～30日の3日間、福岡サンパレスを中心に福岡市内の各会場で開催された。大会には、全国から2,240名の会員が参加し、「未来への扉を開く 教育のチャレンジ! 福岡から」を大会スローガンに、熱心な研究討議が展開された。

第1日 10月28日 (水)

全日中常任理事会, 全日中理事会
全体協議会運営委員会, 分科会運営委員会

第2日 10月29日 (木)

【開会式】

伊藤敏典大会会長が「これからは実社会との関わりを更に重視し、個人の自立と様々な人々との協働に向けた力や困難に直面しても諦めることなく臨機応変に行動する力など、社会を生き抜く力を育成することが必要となります。」と、新たな研究協議会主題の意義づけと活発な研究協議への期待を込め、挨拶した。

続いて、河野敏春大会実行委員長が「全国からの提案や実践に基づく研究成果や課題を共有することは意義深いものがあります。全国の中学校長の英知と創造力を結集し、我が国の中学校教育の一層の充実発展を期待しています。」と挨拶した。

祝辞が、文部科学大臣、福岡県知事、北九州市長、福岡市長、福岡県教育委員会教育長の5名からあった。

【文部科学省説明】

文部科学省大臣官房審議官伯井美德氏から、①

高大接続改革の動向について②学習指導要領改訂の方向性について③道徳の教科化④学校教育法の一部改正関係⑤不登校児童生徒対策関係を中心に説明があった。

【全体協議会】

〈第1研究協議題：全日中提案〉

全日中教育研究部長福井正仁氏から、「学校の教育力の向上 確かな学力の定着と伸長～教育研究部の調査研究を通して～」と題し、調査研究に基づいた提案がなされた。

〈第2研究協議題：地区提案〉

福島県飯館村立飯館中学校長和田節子氏から「感謝と感動、そして前進。災害を乗り越え、たくましく生きる生徒の育成～今だから、飯館中だからこそできること～」と題し、「継承」から「創造」へ向かう教育活動の提案がなされた。

第3日 10月30日 (金)

【全体会】

大会実行委員長より「大会宣言(案)・決議(案)」が提案され、承認された。

【記念講演】

北九州市出身で、医療活動を中心に行っているNPO法人ロシナンテス理事長川原尚行氏の「ひとはみんなの為に みんなはひとりの為に」と題する講演が行われた。東日本大震災の時にもいち早く現地入りし、災害地医療に携わり、心のケアにも配慮した支援活動を実施したということだった。現在でも、スーダンと東北での活動を続けていることをお話しになり、川原氏の熱い思いが伝わってくる講演であった。

【閉会式】

大会会長と大会実行委員長の御礼の挨拶に続き、次期開催地である宮城県の星会長の挨拶と紹介DVDの放映がされた。最後に宮城県の校長先生方が来年度の参加をアピールし、3日間の大会が終了した。

(利府町立利府中学校長 佐藤 博人)



第1分科会に参加して

「生きる力」を育成する 教育課程の編成・実施・評価

記録：石巻市立石巻中学校長 渡部 洋

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 新しい教育システムを有効活用した教育課程の編成・実施・評価

施設一体型小中一貫教育校のもつ「よさ」を生かした教育の実践 (熊本県)

- (2) 一点突破で現状を打破し波及効果を生み出す

学習指導，生徒指導で課題を抱える学校を改善するための実践 (大分県)

2 実践の概要・内容

- (1) 熊本県宇城市立豊野中学校の実践

- ① 新しい管理システムによる，施設一体型一貫校ならではの運営体制の構築
- ② 一貫校のよさを生かす指導方法の工夫・改善と実践

- (2) 大分県杵築市立豊野中学校の実践

- ① ノーチャイムの復活による，生徒の自主性・積極性の育成
- ② 校長がリーダーシップを発揮できる組織づくりの推進
- ③ 学校のイメージ改善のための2カ月間毎日授業公開の実施

3 全日中からの指導助言

両校の提案は，校長として，学校・地域の実態を踏まえ，明確な教育ビジョンの上に立った，積極的に教育改革に取り組む素晴らしい実践だった。

熊本県の発表は，施設一体型小中一貫校のもつ「よさ」を生かした教育の創造から，組織づくり・人材育成・指導方法の工夫改善による教育システム構築の取組が見られた。

大分県の発表は，県教育委員会が進める「芯の通った学校組織」推進プランを学校経営に積極的に取り入れ実行した。特に，「ノーチャイム」の取組は，生徒や教職員に「気付き，考え，行動する」ことの大切さを教える実践であった。

第2分科会に参加して

『生涯にわたり学習する基盤を培う 「確かな学力」の定着と向上』

記録：柴田町立槻木中学校長 永山 晋

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 『「赤中授業のスタンダード」を基盤とした授業改善』のテーマで，「生徒が主体的に学習に取り組む態度の育成」，「教職員の意識を統一し，同じ方向にベクトルを合わせた実践」を追求 (高知県)

- (2) 「基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得に向けた組織力向上への取組」のテーマで，「確かな学力の定着と向上に向けて校長として組織力向上にどのように取り組むか」を追求 (徳島県)

2 実践の概要

- (1) 高知県香南市立赤岡中学校の実践

- ① 「赤中授業のスタンダード」の作成
- ② 「赤中授業のスタンダード」を活用した研究授業・教育活動・学級経営
- ③ 授業評価表(参観者用・生徒用)により改善点の明確化
- ④ 授業改善に向けた検証活動
・「赤中授業のスタンダード」に照らした研究協議

- (2) 徳島県美馬市立三島中学校の実践

- ① 組織力向上に向けた取組
・「強みを生かす」という意識の浸透
・職員の意識の統一と同僚性の醸成
- ② 指導力向上への取組
- ③ 学力向上に向けた具体的な取組
・個別指導の徹底と徳島県学校マネジメント学力向上実行プランの活用

3 全日中からの指導助言

全日中教育ビジョンの提言1「確かな学力」に示された指針に関して，校長のリーダーシップの下に明確な目標に向かい，職員の組織としての意識向上が図られる中で，実践が成果に結びついた研究発表であった。

第3分科会に参加して

「心に響き、 心を耕す道徳教育の充実」

記録：利府町立利府西中学校長 佐々木 勉

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) より良い人間関係の構築と家庭・地域との交流を通して (石川県)
- (2) 道徳教育推進のための体制づくりと道徳の時間の充実 (静岡県)

2 実践の概要・内容

- (1) 石川県の実践
 - ① 学校研究・校内研修の活性化はかる道徳教育推進体制の確立
 - ② 校種間で連携し、人間関係づくりを視野に入れた多様な体験
 - ③ 道徳実践力を高める体験活動の推進
 - ④ 各教科と関連を図った生き方の自覚を深める指導の推進
 - ⑤ 家庭や地域社会の教育力向上に向けた取組
- (2) 静岡県の実践
 - ① 榛原地区に創設された「教科等研究員制度」を活用した取組
 - ② 「榛原地区教育研究発表会」での実践発表を通しての道徳教育推進教師の育成
 - ③ 小・中学校合同の道徳研修会における取組
 - ④ 道徳教育推進のための環境づくり

3 全日中からの指導助言

石川県の発表は、道徳教育年間指導計画の作成、家庭・地域と連携した体験活動の導入、地域人材発掘の三つの支援を校長の経営視点として明確に示している。静岡県の実践は、地区校長会がイニシアチブをとり、明確な方向性と各校の特色を活かした実践である。両発表ともに、校長もしくは校長会のリーダーシップの下、保護者、地域、教職員に意識変化が見られた取組である。

第4分科会に参加して

「健やかな身体の育成と 体力の向上を図る教育の充実」

記録：登米市立佐沼中学校長 大内 俊吾

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 小学校から肥満度が高い生徒の実態改善を図るために、体力向上と健康の保持増進を他機関等との連携を図りながら進める方策の有効性を探る。
(宮城 登米市 研究3年次 / 3年計画)
- (2) 市内中学校の「放射線被害と体力等の相関」の実態を把握し、具体的な課題を明らかにし実効性のある対応案を校長会として探っていく。
(福島 郡山市 研究1年次 / 3年計画)

2 実践の概要

- (1) (宮城)

中学生の肥満解消のために

 - ・身体作り運動を明確に単位時間に位置づけた保健体育の授業改善
 - ・小中連携を意識した運動部活動の展開
 - ・小学校長会や市保健養護部会・栄養士と連携した保健指導や栄養指導の展開
 - ・体力低下・健康被害の一因である『携帯電話等の使用』を制限した保護者連携の取組
- (2) (福島)
 - ・震災と体力健康についての関連を把握するためのアンケート調査(6項目)実施
 - ①運動能力・体力の低下認識 ②部活動参加率 ③健康教育の取組事例 ④食育の取組事例 ⑤学校の取り組むべき方策 ⑥体力・健康教育の現状
 - ・体力・運動能力テストの分析

3 全日中からの指導助言

両県の発表共に、実態を把握したうえでの課題把握がなされていて『全日中教育ビジョン』の趣旨を反映している。宮城の発表は組織連携・家庭連携・小中連携の実践例として大変参考になる発表であった。

* 福島は次年度以降具体的な実践となる。

第5分科会に参加して

「未来を切り拓くための
キャリア教育の視点に立った進路指導の充実」

記録：栗原市立栗駒中学校 上杉 良範

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 体験的活動を通して基礎的・汎用的能力を醸成するキャリア教育 (山梨県)
- (2) 教育活動全体を通じた計画的、組織的なキャリア教育の視点に立った進路指導の充実 (長野県)

2 実践の概要

(1) 山梨県忍野村立忍野中学校の実践

キャリア教育を推進する上で、体験活動は極めて重要な取組であるが体験的活動をもってキャリア教育とみなす傾向が指摘されている。そこで、進路決定や将来に向けて、活動のねらいや実際の活動を通して、身に付ける力を明確にして、職場体験学習を行うことを重視している。また、事前・事後指導、保護者や地域の啓発・連携のあり方等を3校の実践を検証しながら見直し、支部毎に組織的な実践研究をしている。

(2) 長野県安曇野市立明科中学校の実践

学校での既存の取組をキャリア教育の4つの視点から見直し、体系化することに焦点を当て、調査及び研究をし課題を明らかにする。さらに、各校で行われてきたキャリア教育の取組を中学校区での一貫した理念で子どもを育てていくために教師の意識改革を校長としてどう推進していくかを探ってきた。

3 全日中からの指導助言

キャリア教育のねらいや育成したい能力を明確にし、校長のリーダーシップの下で取り組んだ研究実践が示された。

職場体験学習を通して活動のねらいや生徒達に身に付けさせたい力を受入事業所にも明確に示し、単なる活動に終わらせることなく自分の進路やこれからの生活、学習について考えて行くきっかけを与えていた。

校長がリーダーシップを発揮し、キャリア教育について教員の意識を高め、組織を整備し、家庭や地域、関係諸機関との連携・協力関係を深める中で、研究を推進し、豊かな体験学習を実践した事例である。

第6分科会に参加して

「自己肯定感や達成感のある
豊かな学校生活を築く指導の充実」

記録：涌谷町立涌谷中学校長 忽那 正範

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 学校と自分の個性を生かした「チームプレー」を目指して (鳥取県)
校長の国語教師・司書教諭としての個性と経験を踏まえ、「ことば」を大切に学校全体のベクトルを揃えテーマに迫った取組
- (2) 一人一人の生徒に向き合い、組織で取り組む不登校支援 (岡山県)
登校の約束の徹底を図り、専門家を迎え、全校体制で不登校出現率を低下させた取組

2 実践の概要

(1) 鳥取県倉吉市立久米中学校の実践

- ① 教職員集団や教職員と生徒のチームプレーを目指し、「ベクトルを揃える」ため経営の重点を「今年の漢字」として示すなど校長の意図を印象的に伝える工夫をした。
- ② 生徒のチームづくりのため「言葉の力」「数値」をキーワードとし、数値目標を掲げさせて生徒会活動に取り組みさせた。
- ③ 校区小中連絡協議会の連携組織を校長部会が統括し、「久米中学校区目指す子ども像」「目指す授業像」を策定し、具体的な取組を小・中学校が統一して行った。

(2) 岡山県赤磐市立桜が丘中学校の実践

- ① 学校経営計画に「学校は毎日来るところ」と明記し、欠席者ボードに工夫を加え、2日連続休めば家庭訪問等の「登校の約束」の徹底を行った。
- ② 大学准教授をスーパーバイザーに迎え、不登校対策委員会を充実させた。
- ③ 土曜チャレンジスタディや生徒会リーダー研修会を実施するなどの教育活動改善を図り、「魅力ある学校づくり」を行った。

3 全日中からの指導助言

両発表は「全日中教育ビジョン」の提言2「健全育成の推進」に添った実践であった。校長が示す明確な経営方針の下、全教職員が計画的に取組を進め、不登校の減少や家庭、関係機関等との連携強化に当たった参考となる発表であった。

第7分科会に参加して

「質の高い教育を実現するための
人材育成の推進」

記録：気仙沼市立新月中学校長 小野寺正一

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 「チーム後志の人材育成に向けた取組」と題した研究。人材育成の課題解決の視点を整理し、校長の働き掛けを提案した。

(北海道・後志地区)

- (2) 「教員の課題意識の向上と研修の充実を目指して」と題した研究。「小樽スタンダード」に基づき、各校や校長会の工夫した研修による人材育成を提案した。(北海道・小樽市)

2 実践の概要

- (1) 北海道・後志地区の実践

人材育成の課題解決として「経験年数」に応じた研修や、「組織的」な研修の実施が強調された。また、校長の働き掛けとして「ビジョンを示す」「システムをつくる」「役割をもたせる」「評価する」の4つの行動が提案された。中教審答申の「4つの教師力」との関係性を考慮した人材育成の試みである。

- (2) 北海道・小樽市の実践

学力向上にかかわる改善方策である「小樽スタンダード」を実践するための多様な研修実践が報告された。市内中学校で共同した取組がなされ、評価活動も共通して行われている。校長会主催の研修会では、ミドルリーダーの育成を意識しながらも、人材育成の多様な視点から研修会を実施している。

3 全日中からの指導助言

2つの研究とも、校長会の組織的、継続的、計画的な取組に基づく研究である。後志地区は経験年数に応じた研修について、小樽市では指導方法や課題意識の向上を図る取組について考察している。校長のリーダーシップや関与の仕方、校長会の補完機能などについて示唆に富んだ研究である。どちらの研究も、全日中教育ビジョン(改訂版)の人材育成の改善の方向性に沿った取組であり、校長の教職員を生かすマネジメント力が発揮され、教職員の意識改革から個々の力量を高めた、優れた実践である。

第8分科会に参加して

「時代の要請に応える
学校経営の充実」

記録：大崎市立古川北中学校長 田中 克宏

1 テーマ及び提案の趣旨

- (1) 組織的・継続的な特別支援教育の推進体制の整備と保護者への啓発

特別支援教育の充実に向けて、障害のある子供の充実した教育と、障害のある子供と障害のない子供が地域で共に「生きていくための力」を育てるための取組 (滋賀県)

- (2) 防災教育を中心とした地域連携

大阪市の港湾に位置する人工島での高齢化・少子化に伴う課題を背負う生徒の防災意識の高揚を図る取組 (大阪府)

2 実践の概要

- (1) 滋賀県大津市栗津中学校の実践

- ① 校長の学校経営ビジョンの浸透
- ② 「共同的な学習」の推進
 - ・4人のグループ学習による学び合い
- ③ きめ細かな支援・指導の推進
- ④ 特別支援教育への意識の高揚と知識理解
- ⑤ 「個別支援の必要な生徒」のリストアップ
- ⑥ 機能的な組織運営を目指した取組
- ⑦ 教育委員会や諸団体との連携
- ⑧ 特別支援コーディネーターの養成

- (2) 大阪府大阪市立南港南中学校の実践

- ① 合同防災訓練の実施
- ② 地域清掃ボランティア等の取組
- ③ 「認知症サポートキャラバン」の実施
- ④ 「徘徊SOSネットワーク」の構築
- ⑤ 昼間のサポートチームの結成
- ⑥ 地域のメリットを見つけ出す取組

3 全日中からの指導助言

- (1) 校長としての明確なビジョンを基に、リーダーシップを発揮し「特別支援教育」を柱にした組織的・継続的な取組である。全日中教育ビジョン(改訂版)の提言5に添った実践であった。

- (2) 学校の立地条件等でデメリットとして捉えがちなことを、逆にメリットとして捉え、防災教育の視点から、地域連携を目指した実践である。全日本教育ビジョン(改訂版)の提言9に添った実践であった。

第34回 宮城県中学校長会研究協議会 仙台大会



10月22日（木）岩沼市において、第34回宮城県中学校長会研究協議会仙台大会が「社会を生き抜く力を身に付け、未来を切り拓く日本人を育てる中学校教育」の大会主題の下、開催されました。

開会行事では、中島順也大会実行委員長の開会宣言の後、星 豪宮城県中学校長会会長が開会の挨拶を行いました。

「東日本大震災から4年7カ月、復興から再生への歩みを進める中、被災した沿岸部では、未だに厳しい教育環境にあり、一日も早い復興が望まれる。本研究協議会は宮城県と仙台市との分離開催2回目となる。主管地区である仙台管内中学校長会の熱意に支えられ開催できることに感謝する。今年度は登米地区で取り組んできた「健やかな身体の育成と体力の向上を図る教育の充実」について、5月の東北地区中学校長会研究協議会青森大会に引き続き、第66回全日本中学校長会研究協議会福岡大会でも発表される。家庭や地域、関係機関と連携した教育活動や小学校長会と研究の連携にまで進められたことは大きく評価される」と挨拶がありました。

開会行事に続き、前岩沼市教育長 影山一郎先生から「生涯現役！ 一笑青春 一木を見て森も見る」と題してご講演をいただきました。

冒頭に先生から、「人生は一度、笑顔のある人生を送ろう。そのために目標、友、活動の3つをもって人生100年の時代を生きていきたい」とお話しがありました。

演題にある「木を見て森も見る」について、「木」

は今現在であり、「森」は人生全体を指しているとのこと。

「木」（今現在）については、今は愛のない時代。学校はあるが魅力がない。家庭はあるが愛がない。地域はあるが関わりがない。

そうした中であってより良い人間関係づくりのポイントとして、①柔軟性（一年一昔、新しい目と心が必要）、②物は言いよう（年代に応じた言い方を）、③認め、褒め、聞き上手に（しゃべるより2倍聞くこと）の3点が大切だと話されました。

また、人生50年の時代では、「始め良ければすべてよし」だったが、人生100年の時代では、「終わりよければすべてよし」であるとのこと。

「森」（人生）については、人生奇数世代がドラマチック。10代は新鮮な時代、30代は力の付く時代、50代は最高にドラマチックな時代。

退職後の60代から大切なものとして、①「健康」（今日用、今日行、貯筋）、②「楽しみ」（趣味と友達）、③「活動」（生涯現役で人の役に立つ活動）の3つを挙げられ、最後に「笑顔と明るさ」、「苦しい時こそ前向きに」といった心構えで人生を生きていこうと締めくくられました。

誰もがいつかは退職を迎えます。影山先生の人生賛歌とも言えるご講演は、これからをどう生きていくかについて私たちに大きな示唆を与えてくださいました。

閉式では、平成28年度本県で開催される全日本中学校長会研究協議会宮城大会のプロモーションビデオの上映がありました。震災からの復興の様子を描きながら「感謝と歓迎」をコンセプトに制作された大作に、参加者は感心しきりでした。

結びに、鳥海義弘大会副会長が、仙台管内中学校長会並びに関係各位へ御礼を述べ、平成29年度は大崎地区で開催されることを報告し、全体会は閉式となりました。

（角田市立金津中学校長 伊藤 浩）

研究題 健やかな身体の育成を図る教育の充実（石巻地区）

第1分科会に参加して

石巻市立飯野川中学校長 菊地 正 明

1 はじめに

第1分科会の研究主題を受け、石巻地区中学校長会から「健やかな心身を育成するための安全教育の在り方～災害安全を中心とした取組を通して～」の研究発表・提言があり、その後、関連する各地区の実践発表等をもとに研究協議が行われた。

2 研究概要について

(1) 石巻地区は、東日本大震災で最も多くの犠牲者を出した地域である。震災後5年目迎えようとしている現在においても未だに仮設住宅での生活や学区外通学を余儀なくされている生徒が存在する。また、統合を余儀なくされた学校や新校舎建設まであと数年かかる学校もある。復興への道りは長く、記憶や記録の伝承を含めて課題が山積している。それらを踏まえ、災害安全を中心とした安全教育の実態・課題を調査・分析した結果から、校長として「3つの視点を大切にしながら各学校の実態や環境にあった取組が必要である。」との提言と、具体的な実践例の紹介があった。

(2) 災害安全に関する校長としての視点

- | |
|--------------------------|
| ア 生徒が身に付ける災害対応能力 |
| イ 教職員の共通理解・実際に行動できる体制づくり |
| ウ 地域や関係機関との連携 |

(3) 視点ごとの実践例

<視点アの実践例>

- ・「防災学習のサイクル」(矢本一中)
- ・「生徒の手による避難所開設準備訓練」(牡鹿中)
- ・「防災マップの作成」(湊中)

<視点イの実践例>

- ・「学校安全推進会議(WG1) 学校防災基本方針(WG2) 防火管理(WG3) 防災教育についての取組」(石巻市教育委員会と校長会)

<視点ウの実践例>

- ・「地域防災連絡会と連携した活動」(青葉中)
- ・「いのちの石碑プロジェクト」(女川中)



3 各地区の取組及び意見交換について

- ① 中学生の心の動揺と心のケアについて
- ② 地域と親、中学生の防災意識を高揚させるための方策について
- ③ 地域との合同防災訓練に参加する場合の学校の課題について
- ④ 全校登校日として、防災訓練に参加した事例について
- ⑤ 中学生に何ができるかを考えさせながら、段ボールの個室作りや炊き出し用のかまど作りに取り組みさせた事例について
- ⑥ 地域の方々になかなか参加してもらえないという課題について
- ⑦ 2年前の大崎地区の発表事例(災害対応力・イマジネーションを身に付けさせる)について

など各地区の実践例の紹介や、課題についての活発な意見交換がなされた。

4 最後に

生徒の心身の安全・安心、命を守ることは、学校を預かる校長にとって最も重要な職責である。よって、今回の研究発表や各地区の取組、参加者の意見等を今後の学校経営に生かしていきたいものである。

研究題 健やかな身体の育成と体力の向上を図る教育の充実(大河原地区)

第2分科会に参加して

登米市立米山中学校長 及 川 長五郎

1 はじめに

第2分科会では「健やかな身体の育成と体力の向上を図る教育の充実」の研究題で大河原地区校長会から「大河原地区の防災教育の充実」について話題提供があり、研究協議を行った。協議会は話題提供、3グループに分かれての研究協議、全体協議の内容で進められた。

2 話題提供の概要

(1) 研究の目標、方法、計画

研究目標は東日本大震災を経た大河原地区の今後の防災教育の在り方について、調査研究を通して明らかにするとした。研究方法については、マインドマップの手法を用い、各校からの回答を類型化し、特徴や課題を明らかにするように努めた。研究計画については、調査Ⅰから調査Ⅴまで5回にわたって調査を行うこととした。調査計画・集計・分析を行い、各校長に結果を返し、それぞれが各校に持ち帰るという取組を重ねてきた。

(2) 調査内容・調査結果

調査Ⅰ — 平成25年12月実施

「東日本大震災以降に取り組んだ防災教育に関する内容」

- ・実効性のあるもの、基本的な部分を大事にしていこうとする見直しが行われている。

調査Ⅱ — 平成26年8月実施

「防災教育に関する各校の課題」

- ・防災教育における地域との連携、防災意識の高揚と各校の喫緊の課題をさらに調査した。

調査Ⅲ — 平成27年1月実施

「各校の喫緊の課題」

- ・学校の地理的条件で発生すものへの対策。

- ・防災教育のさらなる充実に関するもの。「地域との連携」

- ・連携が進んでいる地域もあるが、行政に働きかけても進展が見られない学校もある。

「防災意識の高揚に関して」

- ・実践の中で双方の意識が高まっていく。
- ・地域住民としての意識の育成が必要である。

調査Ⅳ — 平成27年3月実施

「生徒の防災意識について」

- ・生徒の意識の高まりを予測したが、予想と異なっており、これまでの指導を反省した。

調査Ⅴ — 平成27年7月実施

「生徒の防災意識を受けての実践内容」

- ・金ヶ瀬中から、本年度、改善を加えて実施した実践発表と23校の実践のまとめがあった。

(3) 成果と課題

成果として、自校の現状を認識できたことなど5点、課題として、さらに指導の工夫や充実を図る必要があることなど3点が挙げられた。

- ・この後、遠刈田中より蔵王山噴火に関する防災教育の紹介があった。

3 グループ協議から

Aグループからは、鹿児島への噴火視察、保護者・地域への意識調査の質問があったこと、地域の防災意識を高める校長の果たす役割は大きいと報告があった。Bグループからは、各校の防災教育の実践や課題、今後の取組が報告された。Cグループからは、発表についての質問と各校長の学校における取組の実践と課題が報告された。

4 全体協議

時間の都合で、隣同士で数分間、発表についての話し合いをもち、グループ代表の3名が感想を述べた。

5 おわりに

大河原地区校長会から3年間にわたる貴重な研究について話題提供をいただいた。その研究の成果と課題を参加者で共有し、グループ協議でさらに深めることができた。校長として防災教育の推進に向け大変参考になった。



研究題 時代の要請に応える学校経営の充実（仙台地区）

第3分科会に参加して

気仙沼市立津谷中学校長 吉田 純 一

1 はじめに

全日中第8分科会研究題「時代の要請に応える学校経営の充実」を受け、研究題を「教師力の向上を目指した取組の充実～学校を支える力を身に付けさせる具体的な施策～」と設定し、仙台地区中学校長会の研究について協議した。

2 研究主題について

教師力については、中教審答申において『学校力の強化』のため、尊敬され信頼される質の高い教師の養成・確保」と、「最新の専門的知識や技術を身に付けること」が求められている。これらを踏まえ、仙台地区中学校長会では、研究主題を「教師力の向上を目指した取組の充実」と設定した。

3 研究のねらい

「学校を支える力」についての現状と課題を明らかにし、教員の経験年数や役割・校務分掌等による身に付けさせたい「学校を支える力」を明らかにするとともに、その力を身に付けさせるための課題を明らかにする。

4 研究の概要（平成27年度の取組）

仙台地区中学校長会が、平成25年度から取り組んだ研究の3年次であり、本年度の副主題を「学校を支える力を身に付けさせる具体的な施策」とした。

(1) 研究のねらい及び方法

教員の高齢化が進む中、宮城県教職員マスタープラン第Ⅰ期・Ⅱ期の教員養成には、ミドルリーダーのような指導教員が重要で、経験年数と実年齢を比較し、職員構成の類型化を図り、職員構成と校務分掌の特徴及び課題解決のための工夫と、ミドルリーダーの活用事例をまとめ主題に迫った。

(2) 調査結果

- ・ 仙台教育事務所管内は、学校を支える教員

の年齢構成と経験年数は不均衡で、新規採用教員が増加傾向にある一方で、30代前半の教員が少ない。

- ・ 校務分掌ごとの経験年数では、主幹教諭等クラス、研究主任等クラス、普通学級担任等クラス、特別支援担任等クラスの4層に分かれている。
- ・ ミドルリーダーは、経験豊富な50歳前後で年齢幅が少ない主幹教諭等クラスと、経験年数が少なめで年齢幅が大きい研究主任等クラスの2層となっている。
- ・ 若手と組み合わせることにより、ミドルリーダーを多様に活用している例が多い。

5 研究のまとめ

- (1) 第Ⅰ期・Ⅱ期の教員の育成には、組織的な取組みが必要である。
- (2) 経験年数に応じ、適切に校務分掌を担当させる取組みが多く見られる。
- (3) 第Ⅰ期・Ⅱ期の教員の育成には、ミドルリーダーが重要で、その自覚を高めながら、第Ⅰ期・Ⅱ期の指導を通して、学校運営の中核的な役割を担うための資質・能力の育成を図っている。

6 おわりに

県全域で見られる少子化や過疎化、震災の影響による学校再編・統合が進む中、教職員の年齢構成や校務分掌の偏りの解消が多くの学校の課題となっている。それらの現状を踏まえ、学校教育に求められている次世代を担う人材の育成のため、仙台地区中学校長会が調査研究、発表した「教師力の向上を目指した取組の充実」は、これからの学校経営にとっても参考になった。

平成27年度

宮城県中学校長会事務局

〒981-1224

名取市増田字柳田230 名取市立増田中学校内

TEL：022-384-8062 FAX：022-384-8063

E-mail：miyagi-kochokai@wine.plala.or.jp

HP URL：http://www13.plala.or.jp/miyagi-jhs/

郵便振替 2240-1-41664

事務局員：佐々木 美代子

根本 恭子

